



## 主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

聖体より先に、みことばが

あらためて、主のご降誕おめでとうございます。私たちはミサをささげて、主の降誕を祝いました。昨日話しましたように、都市の封鎖（ロックダウン）のため教会でミサをささげることでもできなかった国があります。身近な関係者が感染したためにミサが中止になった教会もあります。私たちはこうした残念な思いで今日を迎えた人、打ちひしがれている人のことも心に留めて、心を込めてミサをささげるべきです。

主の降誕日中のミサは、ヨハネ福音書の冒頭「言（ことば）が肉となった」という箇所、抽象的に見えます。毎年、この朗読箇所を日中のミサは取り上げています。この朗読と、今年の新型コロナ感染の状況が、私の中では見事に結びつきました。感染拡大の中、ミサを中止せざるを得なかった教会のために、この朗読箇所が人々を慰めてくれます。

それは、冒頭のひとことで十分です。「初めに言（ことば）があった。」（1・1）そうです。初めに、神のことばが響き渡ったのです。これは天地創造の初めから、救い主が人となり、時が満ちて宣教活動を始めた際も、「初めに言（ことば）があった」のです。イエスはいきなり最後の晩餐を制定して弟子たちに委ねたのではなく、ことばで人を見たと、ことばの食卓が3年間あってから、聖体の食卓が用意されたのです。

これは、イエスがこの世におられた時だけのことでしょいか？いいえ、今も同じことです。ミサの前半はみことばの食卓です。ミサの後半が聖体の食卓です。私たちはみことばの食卓に預かってから、聖体の食卓にあずかっているのです。

夜半のミサから、ミサが中止となった教会があります。その方々はご家庭で、ミサに参加できなかったと唇を噛みしめて残念がっているかも知れませんが、しかしイエスは、すでに二千年前に予告しておられたのです。「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった」と。言（ことば）によって人間は照らされ、命を得ることになると、二千年前から約束してくださっていたのです。

今日私たちは、ヨハネ福音書の冒頭の朗読で、「みことばであるイエス」を確認しました。もし「聖体のイエス」だけが私たちに残されていたなら、ミサに参加できなかった人は慰めを得られず、「闇に住む民」のままだったでしょう。そうではなく、イエスは「みことば」として、「言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与え」（1・12）、今も慰めと希望を与え続けておられるのです。

実は私たちの小教区にも、「みことばであるイエス」が宣べ伝えられることを今か今かと待ち望んでいる人たちがいます。私は今日の日中のミサを「瀬戸山の風」に載せて、全世帯に届けます。あなたも、誰かのためのメッセージとなって、降誕の喜びを届けに行きましょう。